

新世紀のキャンパス

Campus of New Century

東京電機大学  
東京千住キャンパス



キャンパスの玄関に位置する1号館。



写真右上が北千住駅。正面奥の最も高い1号館から時計回りに、2号館、低層の3号館、左手奥の4号館と、建物を4つに集約した。

Photo by Kitajima



キャンパス内に公道が通っているため、学生の安全確保と回遊性の観点から、各建物の2Fを2本のブリッジでつないでいる。

Photo by Kitajima

東京電機大学は2012年4月、創立100周年記念事業として、東京千住キャンパスを創設。東京神田キャンパスの本部機能、教育研究機能を移転した。オフィス街に校舎が分散し、老朽化も進んでいた神田に比べ、新キャンパスはターミナル駅の北千住駅から徒歩1分の好立地。神田の2.5倍にあたる26ヘクタールの広大な敷地に、未来科学部、工学部、工学第二部、関連する大学院の学生、約5000人が学ぶ。

“街づくりの核になってほしい”という地域の期待に応え、「学ぶ者、研究にいそしむ者、訪れる者に“歓び”を与える場所を作り出す」をコンセプトに、門、塀、柵を一切設けない、地域に開かれたキャンパスを目指した。3つのプラザなど広く地域に開放しつつ、最先端のICT技術により、オープン&セキュアな空間を実現した。

1号館は公共的なパブリックゾーンを備えた複合棟だ。地下1F、地上14Fの館内には、1～2Fに2つの500席のホール、3～5Fに法人・大学の本部機能、そのほかのフロアに実験室、研究室、教員室を設置。2号館は地下1F、地上10Fの教育棟で、1～2Fに図書館、3F以上が教室フロアである。厚生棟、学生会館、体育館の3つの建物からなるのが3号館だ。厚生棟には、学生ラウンジ、カフェラウンジ、売店、食堂を集約。学生会館には学生部室、体育館には体育館、武道場、トレーニングルームを備えた。4号館は地上10F建てで、特殊な設備を必要とする実験室・研究室を配置した専門研究棟である。

新キャンパスのテーマは、“人、環境、安全”。教育・研究理念「技術は人なり」にあるように、技術も大量生産・ハイスペック重視から、“人に優しい技術”が求められる時代になった。そこで人と



雨の日の待ち合わせや祭りに利用したいと地域からの要望を考慮したロτζア。



学園祭の舞台となるキャンパスプラザ。奥にライトアップされているのが、学生でにぎわう厚生棟だ。

の交流に着目し、地域住民との交流プラザや「ロτζア」を設置した。建物内に点在する「アゴラ」は、学生・教職員の交流空間だ。環境面では理工系大学として省エネに注力した。大学の研究成果である技術を実用化した、世界初となる連結式縦型蓄熱槽は、長さ約10メートルのスリムな蓄熱槽を、1号館と4号館に2列ずつ、タテに連結して設置する最新技術だ。安全面では、災害時に2号館を学内の避難所として計画。数百年に1度の大洪水時には5メートルの冠水が想定されるため、全棟の1F

の階高を6メートルとし、電気室等を2F以上に設置した。前述の蓄熱槽の水はトイレ洗浄水に転用でき、まさに次世代の都市型キャンパスと呼ぶにふさわしい。

今年のオープンキャンパス動員数は昨年の1.5倍に増え、一人ひとりの滞在時間も長くなったという。神田ではうつむきかげんだった学生達が、千住では笑顔で前を向いている。地域と連携しながら、次の100年を担う技術者を育て、同大の今後の教育に期待したい。

(取材・文／本誌 能地泰代)



学科ごとにフロアが分かれるため、学科間の交流や、憩いの場として設置された吹き抜け空間「アゴラ」。天井に各棟のイメージカラーを配色した。

740席と学生収容力を高めた図書館。閲覧エリア、ラーニングcommonsエリア、グループスタディールームなどを備える。



講演や学会時に使用する500人席の「丹羽ホール」。PCを利用できるようほぼ全席にコンセントを設置。

